

# テ形節による前触れの用法に関する考察 —学習者の発話の分析を通して—

## Observations on the forerunner usage of the TE-clause : Through the analysis of dialogue transcript by learners

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

橋本加代

Kayo Hashimoto

### はじめに

日本語の複文には、従属節の述語がテ形となり、節を形成しているものがある。このような従属節は「テ形節」<sup>1</sup>と呼ばれ、日本語教育では初級の早い段階で導入されている。しかしながら、このテ形節が持つ用法は、「付帯状況」「継起」「原因・理由」「並列」など多岐にわたっている。また、各用法が文法的に正しい文として成り立つためには、従属節・主節間の主体の異同や述語の性質に関して、様々な制約を守っている必要がある。そのため、テ形の複文は、「継起」や「理由」を表せる接続形式として初級で導入されるにもかかわらず、文法的に正しい文を作って使いこなすには長い時間を要する。本研究では、いくつかあるテ形節の用法の中で「前触れ」と呼ばれる用法に着目し、学習者の誤用の原因と訂正方法について考えていく。

### I. 先行研究

#### 1. テ形節の誤用に関する先行研究

ここでは、テ形節の誤用を扱った先行研究を見る。テ形節の誤用に対する分析は、これまでもいくつかの先行研究で行われ、また、それらの誤用の訂正方法が示されてきた。たとえば、吉田(1994)は学習者のテ形に関する誤用をその原因ごとに分類したうえで、それぞれの訂正方法を示している。ただし、吉田(1994)の誤用分析は「原因・理由」の用法に関するものが主で、それ以外の用法に関しては深く言及されていない。また、吉永(2006)もテ形節の誤用分析を行なった研究であるが、分析対象は「継起用法」と「因果用法」に関するものにとどまっている。さらに、塩入(2012)も学習者のテ形節の誤用を訂正方法ごとに分類した研究であるが、それらの誤用の理由は学習者の母語である中国

---

<sup>1</sup> 本研究では、「動詞」「形容詞」「判定詞(だ・である・です)」「助動詞」「補助動詞」のテ形によって複文の従属節を形成しているものを「テ形の複文」、その従属節を「テ形節」と呼ぶ。ただし、これらのうち複合辞または複合述語として機能しているテ形は扱わない。

語からの干渉という観点で分析されている。

## 2. 先行研究の問題点

前節で述べた通り、これまでもテ形節の誤用を扱った研究はいくつかあった。しかしこれらの研究には、「話し言葉」という観点が不足しているだけでなく、「前触れ」という用法に着目していないために、十分な分析が行われていないという難点がある。以下では、この2つの問題点に関して述べる。

### (1) 話し言葉という観点の不足

先行研究の問題点の1つ目として、「話し言葉」への着目という観点が不十分であるということがある。すなわち、母語話者がテ形の複文を、書き言葉よりも話し言葉で頻繁に使用しているという事実が考慮されていないということである。この事実は他の先行研究でも指摘されている。たとえば、CSJとBCCWJ<sup>2</sup>を使って数量的な研究を行なった丸山(2014)は、それぞれのコーパスに含まれる5つのレジスターごとに「節境界解析」を実施し、各レジスター20万語あたりに現れた節境界の出現数を集計している。このデータを参照すると、「テ節」「デ節」は、書き言葉のレジスター(書籍・雑誌・新聞)よりも、話し言葉のレジスター(学会講演・模擬講演)に多く出現していることがわかる<sup>3</sup>。また、母語話者が話し言葉で使用した接続助詞の数を集計した深川(2007)でも、「～て」は82回使用されており、最も多く使用された「けど・が」(85回)とほぼ同数であることが明らかになっている<sup>4</sup>。話し言葉でのテ形節の使用頻度の高さは、このような先行研究からだけでなく、母語話者の発話を観察することによっても明らかである。たとえば、以下の母語話者の発話には、テ形による節がいくつも連なるものが頻繁に観察できる<sup>5</sup>。なお、「I」はインタビュアーの発話、「NNS」は学習者の発話、「NS」は日本人の被験者の発話であることを表す。

#### (1) [自分の研究テーマを説明する場面]

NS: 黒人女性一の、あの、詩人で、マヤ・アンジェロさんっていう方、あの、クリントン大統領の就任式で詩を読んだ方なんですけれども、彼女にとっても興味を持っていて、今一彼女の本に出会って一すごく一まあ、彼女についてやっていきたいなあっていうふうにすごく思って、【後略】(Araki-20) (インタビュー形式による日本語会話データベース)

また、テ形節の分析に「話し言葉」という観点が不可欠であるということは、このような話し言葉での使用頻度の高さからだけでなく、その訂正方法の違いからも言える。たとえば、前掲の吉永(2006)は、(2)のような学習者の誤用を紹介したうえで、(3)のような修正例を示している。

<sup>2</sup> CSJは「日本語話し言葉コーパス」、BCCWJは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を指す。

<sup>3</sup> 丸山(2014)表3を参照。「テ節」の出現数は、学会-347、模擬-769、書籍-448、雑誌-408、新聞-408。「デ節」の出現数は、学会-2884、模擬-3903、書籍-2122、雑誌-1625、新聞-1080。

<sup>4</sup> 深川(2007)の分析対象は、独自に収集した5人分のインタビューにおける発話である。

<sup>5</sup> このように節がいくつも連なる文は岩崎・大野(2007)によって「非即時文」と名付けられている。また、非即時文は途中の節は「て形」や「たら形」で繋がるが多いと指摘されている(140頁)。

## テ形節による前触れの用法に関する考察

(2) ?お金を落としてレストランに行きませんでした。(吉永 2006)

(3) お金を落としてレストランに行きませんでした。(同)

吉永は、(2)の文に関して「因果解釈の読みが弱くなっている」と指摘し、(3)のように不可能の結果を表す成分を付加することで因果関係を強化する必要があるとしている。しかし、(2)の文が(4)のように発話されたとすれば、不自然ではない。

(4) お金を落としてしまって、それで結局レストランに行きませんでした。

すなわち、テ形を使った複文を、書き言葉のように整った文として扱う場合と、話し言葉のように様々な要素を加えて調整しながら作り上げていく文として扱う場合では、その訂正方法に違いが出てくるということである。しかし、いずれの先行研究でも書き言葉と話し言葉の違いは意識されておらず、主に作文の誤用を扱っていることから、誤用の訂正も書き言葉であることを前提として行われていると考えられる<sup>6</sup>。ここに先行研究の1つ目の問題点がある。

### (2) 「前触れ」の用法への着目の欠如

先行研究の2つ目の問題点は、「前触れ」という用法に着目していないために、十分な分析が行われていない箇所があるという点である。この「前触れ」の用法とは、「主節で述べる内容を従属節で前触れる的に述べる」(日本語記述文法研究会編 279 頁)というもので、たとえば以下のようなテ形節の用法を指す。

(5) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである(日本語記述文法研究会編 2008: 279 頁)

日本語記述文法研究会編によると、この用法はテ形節の用法の中で最も従属度が低く、文の切れ目に近い独立度の高い用法であると言われている。しかし、吉田(1994)および塩入(2012)は、文の切れ目に近い箇所でのテ形節の誤用を指摘しているものの、その誤用の原因に関しては詳しく記述していない。たとえば、次の(6)~(8)のような誤用例を示し、それに対して、独立度の高い「が」「けれども」かまたは終止形に置き換えるべきであるという訂正方法を述べているだけである。

(6) 皆はわかったはずだと思って、学生には一番大切なのは、知識を習うということだ。(吉田 1994:97 頁)

(7) 夢の中のほかのことを忘れて、多分夏休みの一日だね。(塩入 2012: 8 頁)

(8) それは僕の夏休みの一日で、普通に楽しかったです。(同)

これはすなわち、このような文の切れ目に近い独立度の高い箇所に現れるテ形節および「が」「けれども」の使い分けが明確になっていないということである。

本研究では、これらの先行研究の問題点を踏まえ、テ形節の「前触れ」の用法を認定することの重要性を述べたうえで、話し言葉での「前触れ」の用法の誤用を観察し、その誤用の原因を探りたい。

<sup>6</sup> 吉田(1994)では、一部、対話資料も扱っている。しかし、継起用法の定着の度合いに、書き言葉と話し言葉で違いがないという点に言及しているのみである。

## II. 「前触れ」の用法の位置づけ

### 1. 「前触れ」の用法に関する先行研究

ここでは、前述した「前触れ」の用法について詳しく紹介するが、この用法を提示している先行研究は少なく、管見の限りでは日本語記述文法研究会編(2008)のみである。同書では、「テ形・連用形<sup>7</sup>による接続」を以下の8つの用法に分類し、その一つとして(11)「前触れ」の用法を定めている。

- (9) 日曜日、父は釣りに行き、母は買い物に出かけた。(並列)
- (10) 盆地の気候は、冬は寒く、夏は暑い。(対比)
- (11) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(前触れ) (=5)
- (12) デパートに行って、くつを買った。(継起)
- (13) 風邪をひいて、仕事を休んだ。(原因・理由)
- (14) わかっている言わないなんて、ひどい。(逆接)
- (15) 参加者は、幹事を入れて8人だ。(順接条件)
- (16) 胸を張って、堂々と行進した。(付帯状況) (日本語記述文法研究会編 2008:279 頁)

この分類は、従属節と主節との間にある意味関係に着目したもので、その意味関係の捉え方は他の先行研究に比べて詳細である<sup>8</sup>。たとえば、(10)の「対比」や(11)の「前触れ」は、他の研究では言及されていないか、または「並列」の用法に集約されていることが多い。同書では、「前触れ」の特徴を(17)のように説明し、(18)~(21)のような例を挙げている。

- (17) 主節で述べる内容の趣旨を前触れの的にテ形・連用形で述べることがある。従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直すという関係になっている。
- (18) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(=5)
- (19) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。
- (20) 前の晩あまり寝られなかったらしく、眠そうな顔をしている。
- (21) 何度かけても通じないはずで、携帯の電源を切っていたらしい。

(日本語記述文法研究会編 2008: 282~283 頁)

このように、「前触れ」の用法は従属節および主節で述べられている内容の関係性に特徴があるのだが、前述したように、「前触れ」は一般的に「並列」の用法に含まれていることが多い。たとえば、日本語記述文法研究会編の分類に基づいて判断すると、加藤(1995)が「並列」の例として挙げている次の(22)(23)は、それぞれ「並列」「前触れ」、というように別の用法として分類されることになる。し

<sup>7</sup> 同書では、「テ形と連用形は多くの場合、置き換えられる」という前提に立っている。ただし、逆接や順接条件の場合にはテ形のみが用いられ、原因・理由の場合にもテ形のほうが用いられやすいとしている。(日本語記述文法研究会編 287~288 頁)

<sup>8</sup> テ形節の用法を分類した研究には、南(1993)、加藤(1995)、仁田(1997)、吉田(2012)などがある。

かし、加藤(1995)では、これらは共に「テ4」(並列)の例として提示されているのである<sup>9</sup>。

(22) 買い物先でメモを忘れたことに気づいて、朝、電気がまのふたを開ければまだ米のまま、ふろに入ろうとすれば、浴槽の栓を忘れて湯気だらけ、などなど、わが家の日常のほんの一例  
(以下略) (加藤 1995: 212 頁)

(23) さいわい間借りしていたところのおかみさんが親切で赤ん坊に湯も使わせてくれたりしたら  
しいんですがね (加藤 1995: 218 頁)

このように「前触れ」が「並列」の用法に含まれていることが多いのは、「前触れ」と「並列」は、従属節と主節で述べられている内容に時間的前後関係が見られないという点で共通しているからであると考えられる。また、テ形の複文は本来、節間の意味関係を積極的に示すものではないため、各節で叙述されている内容によって節間の意味関係に変化が生じ、研究者によっては別の用法であると判断されることがあるのである。

次節では、これら「前触れ」と「並列」の用法の関係性を明確にするため、日本語における並列表現について詳しい分析を行なっている中俣(2015)を紹介する。

## 2. 並列表現における「前触れ」の位置づけ

中俣(2015)は、日本語における並列表現を包括的かつ体系的に記述した研究である。中俣は其中で、並列表現を分析する際の手法の一つとして、並列表現に対して形式および意味に着目した 11 種類のタグ付けの作業を行っている<sup>10</sup>。たとえば、テ形節に多く付けられたタグの中には、「同評価」「対比」「例示」「精緻化」「付加」「代替」などがあり、これらは従属節と主節の意味関係に着目して付加されている。以下に、テ形節への付与が多く観察された 6 種類のタグに対する中俣の定義とそれぞれの例を示す。例文の下線は中俣による。

(24) 〈同評価〉：並列される要素に対する評価的意味、あるいは要素から推論される意味が共通であるもの。

(例) とにかく安くて自分で自由に色んなところ行きたいというのがずっと自分の旅のスタイルだったものですから。

(25) 〈対比〉：反対の意味ないし反対の評価的意味をもつもの。

(例) 同い年の大卒の同僚は現場監督で、自分は下っ端の 1 人。

(26) 〈例示〉：後の要素が前の要素の例になっているもの。

(例) うちの母は結構最近食事に関して無頓着なところがあって、例えば食塩じゃなくて味塩

<sup>9</sup> 加藤は「文構造の違い」および「節同士の関係の意味」に着目してテ形節をテ1~テ5に分類している。また、テ1から順に、「付帯状況」「継起的動作」「原因・理由」「並列」「発言のモダリティ成分」という意味ラベルがあるとしている。

<sup>10</sup> 中俣(2015)では、「同形式」「同構造」「同評価」「理由」「対比」「例示」「一般化」「精緻化」「付加」「細分化」「代替」のタグを付加している。中俣(2015)147~151 頁を参照。

置いているんですよ。

- (27) 〈精緻化〉：後の要素が前の要素と同じ指示対象をもっているもの。普通、後者の方が詳しい描写になっている。

(例) 加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね。

- (28) 〈付加〉：前の要素の成立が後の要素の成立の前提条件になっているもの。

(例) 以上のような状態で話を始めてもらいましてそれを採録してった経緯があります。

- (29) 〈代替<sup>11)</sup>〉：実際には1つの事態を肯定形と否定形の2つの述語を使って表した。「前件ではなくて後件」あるいは「前件であって後件ではない」という関係。

(例) 白い鳥じゃなくてちょっと赤く赤いニワトリとか歩いているんですよ。

また、中俣はこの他に、どのタグも付かない「無」として以下の例を示している。

- (30) この人はですね、少林寺拳法か何かをやっている人で、どっか会社に勤めていたらしいんですが、退職して、知床に来ました。(中俣 2015: 185 頁)

このようにタグが「無」とされる例では、述べられている内容を結び付けているのは「2つの内容が『この人』の説明であるという点だけ」(185頁)である。しかし、テ形節による並列では、このような「無」に属するものが他のどのタグよりも多かったため、テ形節による並列表現を考えるうえで無視することはできない。

このように、中俣の分析によって、従来テ形節の「並列」の用法として大まかに分類されてきたものを細かく分類することが可能になった。ここで、中俣のタグと日本語記述文法研究会編の「前触れ」がどのように対応しているかを考える。まず、日本語記述文法研究会編が「前触れ」として提示していた例が、中俣のどのタグに当てはまるかを見てみると、「前触れ」の例である(18)および(19)は「精緻化」の特徴に一致していることがわかる。以下の2例は(18)(19)の再掲である。

(18) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。

(19) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。

一方、中俣のタグを、日本語記述文法研究会編が「前触れ」の特徴として挙げている(17)の記述に照らし合わせてみると、「例示」「精緻化」がこれに該当する特徴を有していることが分かる。以下は(26)「例示」および(27)「精緻化」の例の再掲である。

(26) 〈例示〉うちの母は結構最近食事に関して無頓着なところがあって、例えば食塩じゃなくて味塩置いているんですよ。

(27) 〈精緻化〉加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね。

<sup>11</sup> 中俣(2015)は、「代替」も1つの事態を別の側面から述べているため、「代替」を「精緻化」の特別の場合として考えるとしている。(中俣 2015:151 頁)

## テ形節による前触れの用法に関する考察

以上のことから、「前触れ」の用法の下位類型として、中俣の「例示」「精緻化」をここに位置づけることが可能である。

ただし、日本語記述文法研究会編が「前触れ」であるとしていた(20)(21)のような文に関して、中俣は言及していないという点に注意する必要がある。つまり、(20)(21)のような文は、並列表現でありながら、中俣の研究では扱われていないということである。このような文は、テ形節および連用形節に特有であるため、タグの付かない「無」に分類されているか、研究から除外されている可能性がある。このような文の各研究での扱いに関しては今後も目を向けていく必要があるが、いずれにしても、中俣の研究を参照すると、並列表現の中の「前触れ」の位置づけをいっそう明示的なものに行うことができる。以上、紹介してきた先行研究の並列の用法の対応を表にまとめると、以下のようになる。

表 1 先行研究における並列用法の対応

加藤 1995	日本語記述文法研究会編 2008	中俣の並列のタグとの対応		
テ 4 (並列)	並列	同評価	理由	付加
		一般化		細分化
	対比	対比		
	前触れ	精緻化 (代替)	例示	
	前触れ(20)(21)	※扱いなし		

### 3. 「前触れ」と「前置き」の関連性

ここでは、これまで紹介してきた「前触れ」の用法と、それと類似する「前置き」の用法との関連性を明らかにする。「前置き」とは、接続助詞「が」「けど」などによって述べられることの多い、以下のような従属節の用法である。

(31) あそこに大きいビルがありますが、あれは何ですか。(日本語記述文法研究会編 2008: 261 頁)

(32) 休みに行ったんだけど、熱海はいいところだね。(同)

(33) 母に聞いたんだけど、あの人、最近結婚したらしいよ。(同)

「前置き」および「前触れ」には、共通する点が 2 つある。1 点目は、「前置き」と「前触れ」がどちらも「等位節」であるという点である。「等位節」とは、従属節の中でも主節からの独立性が高く、主節と対等な関係にある節のことで、「前置き」および「前触れ」はどちらもこれに該当している。2 点目の共通点は、主節に先立って従属節で前置きをするという機能そのものである。たとえば、会話における前置き表現の分類を行なった陳(2007)が示している前置き表現の定義を見ると、これらの定義は「前触れ」にも一致していることがわかる。陳が示した「前置き」の仮定義は以下の 4 つである。

- (34) 1) 前置き表現は何らかの配慮によって用いられ、主要な言語内容に先立つ。  
2) ディスコースにおいて、その次にくる主要な言語内容を導入するという機能が基本的な機能である。  
3) 前置き表現には、次にくる主要な言語内容に対する判断（態度）や認識といった、話し手の主観が含まれている。  
4) 前置き表現の有無によって、次にくる主要な言語内容の命題・事柄の成り立ちに支障が起きることはない。

一方、これら2つの用法には、明確な違いも認められる。すなわち、ケド節・ガ節による「前置き」は主節の内容の命題外のことを述べているのに対し、テ形節・連用形節による「前触れ」は、主節で述べる内容の別側面を前置的に表現しているということである。たとえば、「前置き」である(35)(36)の従属節は、それぞれ「休みに行った」「母に聞いた」という主節の内容とは異なる内容を提示しているが、「前触れ」である(37)(38)の従属節は、主節の内容を抽象的・概括的に述べたものになっている。

(35) 休みに行ったんだけど、熱海はいいところだね。(=(32))

(36) 母に聞いたんだけど、あの人、最近結婚したらしいよ。(=(33))

(37) 問題が1つあって、父は英語が話せないのである。(=(18))

(38) 田中さんの経歴がまたユニークで、大学院に入る前はコンビニの店長だったという。(=(19))

このように、「前置き」と「前触れ」には、前置きをする方法に明確な違いがある。これらのことから、「前置き」および「前触れ」は、どちらも「前置き表現」のうちの1類型であるが、両者には明確な違いがあることがわかる。

ただし、陳および日本語記述文法研究会編が「前置き表現」として扱っているのは主に、「が」や「けど」などによって述べられる「前置き」であって、テ形節の持つ「前触れ」のような用法は含まれていないことに注意する必要がある。このようにテ形節が「前置き表現」として扱われることが少ないのは、「前触れ」の用法が前置き表現の中でも特殊であるからだと考えられる。この特殊性とは、すなわち、「前触れ」は陳が提示した「前置き表現」の特徴を持っていることに加え、さらに「従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直す」という、他の「前置き表現」には無い、「前触れ」独自の特徴を有しているという点である。このような特殊性により「前触れ」が「前置き表現」として扱われることは少なかったが、本研究では「前触れ」も「前置き表現」のひとつであると位置づけることで、「前置き」との相違点を明らかにすることができた。また、次章で見るとおり、「前置き」と「前触れ」の相違に注目することは、テ形節の誤用を説明する際に不可欠である。次章では、ここで明らかにした点をもとに、学習者の誤用の分析を行う。



### Ⅲ. 学習者の誤用の分析

ここでは、Ⅱ章で明らかになったことをもとに、学習者の誤用について分析し、誤用の原因を明らかにする。冒頭で述べたとおり、本研究ではテ形節が話し言葉で頻繁に用いられていることを踏まえ、話し言葉のデータに見られた誤用を扱う。発話のデータは、「インタビュー形式による日本語会話データベース」（通称：上村コーパス）を使用する。このデータベースには、54人の母語話者および49人の学習者に対して行った20分程度のインタビューでの発話が音声および文字化されたデータで収録されている。このデータベースに収録されている学習者の日本語の学習歴や母語、学習環境はさまざま、レベル分けはされていない。本研究では、この中から学習者が使用したテ形節のうち、誤用であると判断できるものを取り上げ、その中でも従属節部分が「前触れ」の内容であるが不自然な表現となっているものを前触れの用法の誤用であると認定し、それに関して考察する。以下では、その誤用の原因を明らかにしたうえで、適切な訂正方法を提示する。以下では、1. 「前置き」との混同による誤用、2. 従属節に動作性の述語を使用したことによる誤用、の2つのケースに分け、分析を行う。

#### 1. 「前置き」との混同による誤用

Ⅱ-3で述べた通り、「前触れ」と「前置き」は類似している。前触れの誤用の中には、その類似性が原因で誤用となっているものがあつた。たとえば、以下のようなものである。

(39) I: ディーディーさんは、暇な時はどんなことをしていますか？日本で。

NNS: あ、私は、今一、うん、ホームステイに暮らし始めて、あーん、夜帰ってから一、あー、日本語話したり聞いたり機会が多いです、から、あー、うちのー母とー一 一緒にテレビを見たり一、御飯食べたり、する、してる、うん。(Didi-224)

(40) [大きな事件よりも新聞の社会欄にあるような記事が面白いという話の中で]<sup>12</sup>

I: どういう意味でおもしろいんですか。

NNS: えー、まあ、例えば、あの、これは、たまたま昨日、し、あの、朝日新聞読ん、でいて、えー、大正時代、或いは昭和初期の、家庭料理の、本が、なんかこのほど、えー、出た、そうです。で、その記事を読んで、すごくおもしろいと思ったんです。(Howell-37)

(41) [学習者が前年まで勤めていた貿易会社に関する話題で]

I: その貿易会社でどんなお仕事をしてたんですか？

NNS: あー、この貿易会社はね、実は台湾人が、うん、設立して、そして、日本から、えっと一、え、かまぼことか、そういう食品を台湾に輸入して、そして販売する。そして、台湾の木とか、かんようぶつ、あ、あ、観葉植物、あ、そういうものを一日本へ輸出していま

<sup>12</sup> [ ] は文脈上の補足、( ) は聞き手による相槌を示す。また、学習者の語彙に誤用があつた場合、必要に応じて【 】内に訂正を示す。

す。(Chin-40)

これらの誤用では、従属節と主節の間に時間的前後関係が見られない<sup>13</sup>。また、叙述内容から判断して、従属節によって主節の発話の前置きをしようとしていることがわかる。しかし、「前置き」はテ形節によって述べることができないため、誤用になっている。すなわち、各節の叙述内容が、「従属節で抽象的・概括的・結論的に述べた内容を、主節で具体的・詳細に述べ直す」という「前触れ」の用法の関係にないのである。

ここで、これらの誤用に対する訂正方法を考えると、(39)~(41)の従属節の内容は、「前置き」であるため、「前置き」の用法をもつ「が」「のだが」<sup>14</sup>等に置き換えることが必要であることがわかる。この2つの形式の使い分けに関しては、野田(1997)が詳細な研究を行っている。ここでは本研究の主旨から外れるため、詳しい紹介は行わないが、主節に依頼や質問の表現が来ない場合の使い分けの規則として<sup>15</sup>、野田(1997)は(42)を示している。また、野田(1995)は「が」「のだが」の使い分けを考察するうえで、(43)(44)のような例を示している。

(42) 話し手が、聞き手も従属節の事態を知っているとみなせば「が」を、知らないとみなせば「のだが」を用いる。(野田 1997:171 頁)

(43) 「北沢くんでしたね。きみとはゆっくり話す機会も {ありませんでしたが/\*ナカッタンデスガ}、直美に、いい思い出をもたせてやっていただきました。感謝しています。(後略)」(野田 1995:568 頁)

(44) 長嶋茂雄さんに { ? 聞イタガ/聞いたのだが }、キューバの野球には面白い特徴があるそうだ。(野田 1995:569 頁)

野田(1997)が示している(42)のような考えに従うと、(39)~(41)の誤用例においては、従属節で述べられている内容はどちらも聞き手が知らない情報を示しているため、「のだが」を使うべきであることがわかる。このことから、(39)~(41)は次のように訂正可能である。

(39) NNS : 【前略】 あ、私は、今一、うん、ホームステイに [暮らし始めて→暮らし始めたんですけど]<sup>16</sup>、あーん、夜帰ってから一、あー、日本語話したり聞いたり機会が多いです、から、あー、うちの一母と一一緒にテレビを見たり一、御飯食べたり、する、してる、うん。(Didi-224)

(40) NNS : 【前略】 これは、たまたま昨日、し、あの、朝日新聞 [読む、でいて→読んでいたんですけど]、えー、大正時代、或いは昭和初期の、家庭料理の、本が、なんかこのほど、えー、

<sup>13</sup> それぞれの主節は「機会が多いです」「出たそうです」となっており、どちらも動作動詞ではないため、従属節との時間的前後関係が見出せない。

<sup>14</sup> この他にも、文体によるバリエーションに「けど」「のだけど」「のですが」「のですけど」等がある。また、話し言葉では「の」は「ん」と発音される。

<sup>15</sup> ここで問題となっている「前触れ」のテ形では、主節に依頼や質問などの表現は現れないため、ここではそれ以外の場合の規則のみを示す。

<sup>16</sup> 学習者のテ形節に関する誤用を訂正する場合、矢印の左側にもとの形式、矢印の右側に訂正後の形式を示す。

出た、そうです。で、その記事を読んで、すごくおもしろいと思ったんです。(Howell-37)

(41) [学習者が前年まで勤めていた貿易会社に関する話題で]

I: その貿易会社でどんなお仕事をしてたんですか?

NNS: あー、この貿易会社はね、実は台湾人が、うん、[設立して→設立したんですけど]、そして、日本から、えっとー、え、かまぼことか、そういう食品を台湾に輸入して、そして販売する。そして、台湾の木とか、かんようぶつ、あ、あ、観葉植物、あ、そういうものを一日本へ輸出しています。(Chin-40)

## 2. 従属節に動作性の述語を使用したことによる誤用

前節では、「前置き」と「前触れ」の類似性によって生じる誤用を紹介したが、「前触れ」の用法の誤用には、それ以外の理由で誤用となっているものがある。例えば、以下のようなものである。

(45) [学習者の来日経験について話す場面で]

NNS: そうですけど、あー、実は、あー、2年前、あー、も、来ました。あー、日米学生会議に、参加、する為に、あー、日本に、来ました。いろいろな、所を見、行って【=見に行つて】、東京ー、あー、九州の、北九州、と長崎に行つてからー、あー、船で、あー、関西、に、行ってー、からー、会議は、終わった。(Greg-82)

この誤用では、従属節および主節の関係性は「精緻化」ないしは「例示」の用法に該当しているが、従属節の述語が動作性であるために、継起の用法に誤解されやすいのだと考えられる。この誤用のように継起の用法であると誤解される原因は、従属節の「見に行つて」という動作性の動詞が単独の動詞のテ形のまま使用されているからであると考えられる。すなわち、テ形節が「前触れ」の用法となる場合には、原則として動作性の動詞のテ形がそのまま使われることはなく、「テイテ」の形で使用されるということである。実際に、本研究で「前触れ」として示してきた例や、日本語記述文法研究会編が「前触れ」として示していた例を見てみると、従属節の述語は「問題があつて」「ユニークで」「あいまいで」「アルバイトをしてて」のようなもので、述語に動作性の単独の動詞のテ形が来ることはなかった。すなわち、「前触れ」の用法では、テ形節の述語部分に「ユニークだ」「あいまいだ」のような形容詞のテ形や、「問題がある」のような動作を表さない動詞が現れることが多く、動作性の動詞の場合には、単独の動詞のテ形ではなく「ている」のようなアスペクトの表現を加えることによって、動作ではなく状態を表す表現にする必要があるのである。このことは、以下のような前触れの例で使用されている「テイテ」を、単独の動詞のテ形に変えることができないことから確認できる。

(46) 加えて常任理事国には拒否権が与えられておりまして [×与えられて]、五か国のうち一か国でも反対すると決議としてはこれ採択されないんですね<sup>17</sup>。(中俣 188 頁)

(47) [自分の経歴を語る場面で]

<sup>17</sup> 中俣(2015) 188 頁「精緻化」の例を一部変更した。

NNS:【前略】あの一日本語をせっかく今までやってきたからもう少し続けてみようと思って、  
えーパリ大学の、えー日本語科に入って、でーそれをやりながら、えー日本交通公社の  
下請け会社、えーでアルバイトをして [×アルバイトをして]、あの一日本の観光客が  
パリい来ると、まあ空港までの送り迎えとかそういう仕事をやってました。

(Ambaras-26)

そのため、(45)の誤用のように動作性の動詞が単独の動詞のテ形で使用された場合には、本来時間  
的関係を表さない「前触れ」の用法であるにもかかわらず、主節の内容との間に時間的前後関係  
があると解釈されてしまうため、誤用となるのである。このようなことから、(45)の誤用においても、  
次のように「テイテ」の形に変更すると自然になる。

(45) NNS:【前略】いろいろな、所を [見、行ってー【=見に行つて】→見に行つていて]、東京  
一、あ一、九州の、北九州、と長崎に行つてから一、あ一、船で、あ一、関西、に、  
行つて一、から一、会議は、終つた。(Greg-82)

### 3. 「前触れ」用法の誤用のまとめ

本章では、テ形節の「前触れ」の用法の誤用を考察してきた。誤用には大きく分けて2つの傾向が  
あった。1つ目は、「前触れ」をするという叙述内容に関するもので、「が」「けど」などが持つ「前置  
き」の用法との類似性が誤用を招いていた。2つ目は、テ形節の述語が動作性の動詞である場合、単  
独の動詞のテ形のままでは時間的前後関係があると解釈されてしまうことが原因となっていた。これ  
らの誤用の原因は、どちらもテ形節を初めて導入する初級レベルの指導だけでは解決しにくいもので  
ある。しかしながら、現在の日本語教育では、中級レベル以降で改めてテ形の複文を取り上げること  
は少なく、読解教材などに現れた文型を通して、その意味を把握する程度の学習で終えるのが一般的  
である。これがテ形節の誤用を生む原因の一つであると考えられる。

### おわりに

これまでの誤用に関する先行研究では、話し言葉の誤用を扱った研究が十分に行われていなかった  
だけでなく、「前触れ」の用法は並列節の誤用の一部としてしか扱われず、詳しい分析が行われていな  
かった。本研究では、「前触れ」と「前置き」の類似性と相違点に着目することで、「前触れ」の誤用  
の原因を明らかにすることができた。また、研究の対象を話し言葉にしたことで、これまで指摘され  
てこなかった、テ形節の述語の動詞を「テイテ」に変更するという訂正方法が存在することを明らか  
にすることができた。この「テイテ」という形式は、書き言葉では、連用形「～ており」で代用され  
ることが多いため、これまでの書き言葉を中心としたテ形節の研究では取り上げられることが少な  
かったのだと考えられる。また、本研究ではテ形節を用いた並列節の中の「前触れ」の用法のみに着目  
したが、「テイテ」への置き換えという訂正方法は、テ形節を用いた並列節全般に適用できるものであ

る。そのため、「テイテ」という形への置き換えは、本研究で扱った範囲以外にも適用可能な汎用性のある訂正方法であると言える。

しかしながら、本研究では、「前触れ」の用法の誤用であると判断できるものが少なく、学習者の「前触れ」の誤用の全体的な傾向をつかむことはできなかった。誤用が少なかった理由としては、初級レベルでは前置きと主要な叙述内容をそれぞれ独立した単文で述べるため複文が現れなかったことが考えられる。また、中級レベルでは、前置きを「が」「けど」等で述べることが多く、それらが誤用であったとしてもテ形節の誤用としては現れることが少なかったのだと考えられる。上級レベルでは、本研究で扱ったような「前触れ」と「前置き」の混同による誤用がいくつか見られたものの、「テイテ」の形は使いこなせるようになってきているため、全体的に誤用が少ないのだと考えられる。今後は、調査対象とするデータ数を増やすとともに、前置きの「が」「けど」節の誤用との関連や「テイテ」の形の習得時期および、その習得過程に着目した研究を行っていきたい。

## 参考文献

- 岩崎勝一・大野剛(2007)『即時文』・『非即時文』—言語学的方法論と既成概念— 串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『シリーズ文と発話3』135~157頁、ひつじ書房
- 加藤陽子(1995)「テ形節分類の一試案 従属度を基準として」『世界の日本語教育 日本語教育論集』(5)209~224頁 独立行政法人国際交流基金
- 塩入すみ(2012)「日本語の従属節選択について —『て』節を中心に—」『熊本学園大学 文学・言語学論集』19(1)59~80頁、熊本学園大学
- 陳臻渝(2007)「日本語会話における前置き表現」『言語文化学研究. 言語情報編』(2)99~115頁 大阪府立大学
- 中俣尚己 (2015)『日本語並列表現の体系』ひつじ書房
- 仁田義雄(1997)「シテ形接続をめぐって」仁田義雄『複文の研究(上)』87~126頁 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2008)『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- 野田春美(1995)「ガとノダガ —前置きの表現—」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下)』565~572頁 くろしお出版
- 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- 深川美帆 (2007)「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴 —日本語母語話者と比較して—」『言葉と文化』(8)253~268頁、名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 —改訂版—』くろしお出版
- 丸山岳彦(2014)「現代日本語の多重的な節連鎖構造について —CSJとBCCWJを用いた分析—」石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』93~114頁 ひつじ書房
- 森田良行・松木正恵(1989)『NAFL選書5 日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- 吉田妙子(1994)「台湾人学習者における『て』形接続の誤用分析—『原因・理由』の用法の誤用を焦点として—」『日本語教育』(84)92~103頁、日本語教育学会
- 吉田妙子(2012)『日本語動詞テ形のアスペクト』晃洋書房

[使用したコーパス]

CD-ROM「インタビュー形式による日本語会話データベース」(1998)『じんもんこん DATABASE Vol.1』、重点領域「人文科学とコンピュータ」総括班 上村隆一(編集責任者)